

歴史の中の 女たち

第 37 回

マルガリータ・ファレス (1826 ~ 71 年)

ーメキシコ大統領ベニト・ファレスの妻ー

伊藤 滋子



ベニト・ファレス、マルガリータ夫妻
<http://elhumanista.net/busto-de-dona-margarita-maza-de-juarez/>

ベニト・ファレス (1806 ~ 72 年) はメキシコの歴史のなかで最も尊敬される立志伝中の人である。なにしろオアハカ州のゲラタオというサポテカ語の先住民村に生まれ、幼くして両親を亡くして祖父母やおじに育てられた孤児で、12 歳になるまでスペイン語も話せなかったというのに、大統領にまで上り詰めたのだから。12 歳の時、番をしていた羊 2 頭を失くしてしまい、その罰を恐れて 60 キロ離れたオアハカ市に住む金持ちのイタリア人マサの家で女中をしていた姉のもとに逃げて行き、彼もその家の使用人として雇われた。こうして初めてスペイン語の世界に飛びこんだ彼の運命を変えたのは、サラヌエバというフランシスコ会の一神父との出会いであった。

神父はファレス少年の利発なことを見込んで製本の見習いとして彼を自分の家に引き取り学校にまで通わせてくれ、しかも最初入った学校では先住民として見下されてスペイン語もできずに叱られてばかりいるをみて、神学校に転校させてくれる。当時神学校では先住民言語の習得が義務付けられており、サポテカ語で育った彼も劣等感を持たずにすんだ。しかもたちまち優秀な成績をおさめるようになり、ある時学校の劇で古代ローマの大詩人ヴェルギリウスの役をふり当てられた。顔を真っ白に塗って舞台上に登場した彼を見て、観客はその醜さに笑いですが、一旦喋り始めるとそのラテン語の立派さに感嘆し、こんどは拍手が沸き起こったという。フランス語、英語にも習熟し優秀な成績で

神学校を終えた彼は、神父になってほしいというサラヌエバ師の希望に背いて、自由主義者の人々が開いたオアハカ科学芸術院に進学し、法律家になる道を選んだ。彼は生涯を通じて敬虔なカトリックながら、在俗教会にたいしては本能的な嫌悪感を抱いていたと言われる。そして 28 歳でそこを卒業して弁護士の資格を得ると、同じ学院で教鞭をとりながら、オアハカとその周辺の村の先住民のために働き、州裁判所の判事補、州下院議員など、徐々に法曹界や政界で頭角を表すようになった。この頃はまだ時の権力者であったサンタアナの支持者として知られていたが、のちに教会の力を削ごうとした自由主義派に加担したため、中央集権派が台頭した間はプエブラに逃げて 2 年間ほど公衆浴場の管理人をしていたこともあった。

その後政権が変わってオアハカに戻ると、州の最高裁判所判事に任命され、1843 年、彼は元の主人であったマサの養女マルガリータ・マサと結婚した。この時ファレス 37 歳に対してマルガリータは 17 歳、年齢が倍も違ううえに、ファレスには別の女性との間に二人の子供がいた。マルガリータは恐らくマサの実子であったが、社会的偏見を恐れて認知されず、マサ家の養女として育てられた。父親のマサは元召使であったファレスとの結婚に反対したのか、あるいは洗礼簿には捨て子と記載されている娘と、先住民ながら学問を身につけ知的で勤勉、かつまじめという評判の高いファレスとの結婚に諸手をあげて賛成したのかは不明である。

先住民と白人女性との結婚は異例のことであった。

マルガリータは小さい時から家の仕事や商売の手伝いをして育ち、大変性格の良い魅力的な、それでいてとてもしっかりとした女性であった。彼女はファレスの子供を引き取って育て、その後自分でも11人の子供を生んだ（うち4人は夭折）。しかし穏やかな家庭生活は初めの数年だけで、その後は夫の政治活動に翻弄されることになる。

ファレスは1847年、連邦議会の下院議員に選出されてはじめて首都メキシコ市に行くが、すぐに政変によりオアハカに戻り州知事に任命された。朝は5時から夜10時、11時まで働き、財政の均衡、道路の建設、地図の作成、公立学校の数を倍増させるなど、大きな貢献を果たした。この頃マルガリータが第四女を生むが、その子が亡くなると、当時の習慣に反して、法律に基づき教会ではなく共同墓地に埋葬した。

1853年に州知事の任期が終わると母校の科学芸術院の教職に戻るが、サンタアナが11回目にして最後の大統領職に就くと、講義中に逮捕される。州知事時代、米軍の首都侵攻によりオアハカに逃げてきたサンタアナの立入りを拒絶したことに対する復讐であった。ファレスは5分間の猶予をもらって授業を終え、家に立ち寄ってマルガリータに別れを告げた。そして昔から政治犯を収容する監獄として悪名高いサン・ファン・デ・ウルア刑務所に送られたのちキューバへ追放されて、煙草工場で働かされる。その後ニューオリンズへ渡り、そこで元ミチョアカンの州知事メルチョール・オカンボなどメキシコからの亡命者たちを知って、ともにサンタアナ大統領を倒す案を練った。

1854年、メキシコのゲレロ州アユトラでサンタアナを倒す計画が打ち上げられたという報が伝わるとファレスはパナマ経由でアカプルコへ渡りその計画に参加する。初めは下っ端の書記の仕事しか与えられなかったが、そのうちアカプルコのカウディリョ、ファン・アルバレス將軍の顧問となり、55年その人が自由派の臨時大統領になると、その下で法務大臣に任命され、政治改革のための法律の整備にとりかかった。

この時出された『ファレス法』は教会と軍人が徴収する特別税の廃止、軍人・宗教人とも、民事に関することは一般の裁判所で裁判を受ける、教会の専属であった教育の解放など、保守派の力を削ぐことをめざすもので、その翌年出された、教会などが所有する大農園を規制する『レルド法』とともに、メキシコ憲法史上の金字塔といわれる1857年憲法の基礎となった。しか

し国内は改革によって大きな被害を被る教会・軍人の保守派と自由派に完全に分断された。

マルガリータは子供たちを連れて初めてメキシコへ行くが、ファレスは政変のためにすぐにオアハカに戻り、また州知事となる。しかしそれも東の間で、ファン・アルバレス臨時大統領の後を継いで大統領となったコモンフォルトにメキシコに呼び戻されて、今度は最高裁判所長官に指名された。マルガリータもまた首都へ行く。

コモンフォルト大統領は当初両者の融和を図ったがついに保守派を押え切れなくなり、1858年1月アメリカに亡命した。そこで最高裁判所長官であったファレスは自動的に大統領に昇格する。しかし彼が政権に就く間もなく、メキシコは三年戦争あるいはレフォルマ戦争（1859～61年）と呼ばれる、自由派と保守派の壮絶な内戦に突入した。

ファレスが大統領就任の報を受けたのはたまたまグアナフアートにいた時だったが、保守派の攻撃により首都には戻れず、そこから太平洋岸まで追い詰められてパナマへ逃れ、ハバナ経由でニューオリンズへ渡った。行く先々で好奇の目で迎えられ、新聞記者が押しかけてくる。ニューオリンズでキューバ人の武器業者から武器を調達し、その支援を受けて翌1858年ベラクルスに帰還、自由派の州知事の歓迎を受けた。そこにはすでに、子供たちを連れて東シエラマードレ山脈を越えてやってきたマルガリータが彼を待っていた。

彼女は夫の不在中、どのようにして大勢の家族を養ったのか？ しかも夫に送金して彼の生活を支えていたほどだ。初めの間、一家はマルガリータの父が遺してくれたオアハカ市外の家に住んだ。彼女は手当たり次第



左からファレスの姉、ファレス、マルガリータ
<https://www.pinterest.com/pin/421086633881588252/>

に品物を売り、質に入れ、借金し、編み物、レース編みなどで働けるだけ働き、糸、パン、タバコ、お菓子を売る小さな店を開業して一家を支えた。その間夫の方は家族のことに煩わされず自分の政治活動に専念することができた。二人は愛し合い、彼女は夫の政治の信奉者であったことは当時の手紙や証言から明らかで、手紙はいつも「私の尊敬するファレス」ではじまり、「自由とレフォルマ」という言葉で結ばれていた。マルガリータは当時の主婦の常として、いつも引つつめ髪で裾巾の広い地味な服を着ている。一度など山中で崖から落ちた時、洋服の裾が枝に引っ掛かって命を救われたこともあった。ファレスに至っては大統領になってからでさえ、安物の布でできた黒いフロックコートを着つつけ、それは彼をますます貧相にみせ、政敵から揶揄されるのだが、彼は意に介さない。

1860年のクリスマスの夜、ファレスがベラクルスの劇場でイタリアオペラを聴いている最中、ついに自由派が勝利したという報が入ってきた。オペラは中断され、ファレスは観衆にそのことを伝えてメキシコ市へ急いだ。そして61年1月1日政権に就き、3年間続いたレフォルマ戦争は終結した。マルガリータも後を追って首都に向かった。

しかしファレスはようやく政権を掌握したものの、レフォルマ戦争で疲弊したメキシコは膨大な対外債務を払うことができず、モラトリウムを宣言した。それに対して先ず6,000人のスペイン軍が、ついで3,000人のフランス軍と800人のイギリス軍がベラクルス港を占領した。教会をないがしろにされた法王ピオ九世もそれを支持する。何の抵抗もできないメキシコ側がモラトリウムを撤回することによってスペインと英国は軍を引き揚げたが、メキシコ征服の野望を抱くナポレオン三世のフランス軍だけはメキシコ市にまで攻め上り、そこを占領した。そして1864年5月、ハブスブルグ家のマキシミリアン皇帝とカルロタ王妃がベラクルスに上陸する。(第20回「王妃カルロタ」参照)

1864年5月31日、ファレスは首都から退くに先立ち、中央広場に集まった群衆を前に新しい告知があるまで政府を中断すると宣告して、キャラバンを組んでメキシコ北部へ向かい、サンルイス・ボトシ、サルティリョ、モンテレイ、チワワ、パソ・デル・ノルテ(後のシウダー・ファレス)、ドゥランゴ、サカテカスなどを11台の荷馬車に乗せた書類を運んで転々とした。法律家で几帳面な彼は細心の注意を払って国境を越えないようにしながら、フランス軍・保守派の襲撃をかわして逃げ廻り、

「大統領だと名乗るインディオが北部をうろうろしている」と噂された。保守派に支えられたマキシミリアンはもともと自由主義思想の持ち主で、それがもとで兄のオーストリア皇帝と対立したくらいだから、同じ自由主義者のファレスと妥協できると考えて手紙を送るのだが、それに対して彼は「他人の権利を尊重せずに財産を奪うことは国を守る者の命を脅かす犯罪行為である」と答えてにべもなく拒絶した。

両派の間で暗殺合戦が繰り広げられ、メルチョール・オカンボなど多くの人が殺され、教会が破壊された。ファレスは子供たちの安全を考えて家族をアメリカへ送ったが、まったくなじみのない国に、子供たち、長女の夫、孫などを連れ、金もなく、知人もなく、英語も話せず、夫の消息さえ不明な中で暮らさなければならなかったマルガリータの不安はいかばかりであったのだろうか。ファレスたち自由主義者にとって最も困難な時期であったが、亡命した家族にとってもそれは同じだった。

ファレスは娘婿への手紙に、「皆がどうしているのか、家族の消息が分からないのは拷問に等しい。私がどんな気持ちでいるか分かってもらえるだろう。かわいそうなマルガリータ、どんなに苦しんでいることか。どうか子供たちに私のキスと抱擁を送ってくれ。友人のベニトより」と書いている。いつも無表情で、難しい顔のファレスしか見ていないメキシコ人にとって、このような愛情表現は驚きに値するだろう。マルガリータの方も、「あの悪条件の中で、貴方がどうしてやっていけるのか、勇気を失わずにいられるのか分かりません」「勝つまで会えないことはよく分かっています、どうぞ気をつけて」と夫を思いやり、こまごまとした身の回りの品物などを送る。彼女自身が気落ちして疲れ果て、しかも、病気が始まっていたというのに。

実際マルガリータの生活は想像を絶する苦しさだった。友人の領事がマルガリータを訪問したとき、真冬のニューヨークで暖房もなく家族が震えているのをみて、大急ぎで家具を壊して暖炉を焚き、暖をとらせたという。そんな過酷な状態に耐えきれなかった幼い末息子2人は次々と亡くなった。その衝撃は大きくマルガリータも「不幸せな私。痛みは去らず、もう貴方にも会えないような気がする」と弱音を吐くが、ファレスは「悪運につきまわられているようだ。だがそれは我々がどうこうできることではなく、ただ心静かに諦めるしかない」と慰めるしかなかった。「毎日今日こそう駄目かと思う。もう精力を使い果たしてこれ以上はやってゆけない」と

書いた時、彼女はまだ40歳前だった。

1867年2月フランス軍がマキシミリアンを残して去って行くと、アメリカがファレスの気をひくためにマルガリータを大統領の賓客としてホワイトハウスに招き、外交団などを招いて大々的なパーティーを開いた。だが夫がまだ戦いを続けているのにそれを楽しめるはずもない。しかも「2年前にあなたにモンテレイで買ってもらった服しかありません。何かの場合にと思い、誕生日に戴いた耳飾りと一緒にとって置きました」というつましさの中だ。他方本国ではマキシミリアンとカルロタが、贅の限りを尽くして国家財産を浪費していたというのに。

1867年6月、マキシミリアンを銃殺刑にしたファレスは翌月最終的に首都に凱旋を果たした。マルガリータ一家は、亡くなった子供たちの棺とともにボルティモアまでは駐米大使に付き添われ、そこから蒸気船でミシシッピー河を下り、ニューオリンズからアメリカの海岸警備艇で7月14日ベラクルスに到着、大統領夫人として20発の祝砲と民衆の歓迎を受け、メキシコ市に向かった。ファレスは途中まで出迎え、出会った時、ふたりは思わず馬車を降りて双方から駆け寄ったという。

娘たちが次から次へと結婚し、夫妻はときどき二人で散歩に出かけ、あるいは外でお茶を飲んだ。これがマルガリータが心穏やかに過ごせた唯一の時間だった。1871年初め、彼女は44歳で亡くなる。癌であったと言われる。葬儀はレフォルマ法に従い宗教抜きで行われたが、「娘たちは教会で結婚させてやってほしい」と言い遺した。

1871年、マルガリータの死後半年ほど経って大統領選挙があった。二つの動乱を乗り越え、ようやく国家再建に取り組む時がきたファレスは権力を手放そうとはせず、周囲の反対を押し切って強引に再選を果たした。しかし政治的野心とは裏腹に、マルガリータを失ったあとの彼は急速に生きる意欲を失い、翌年、妻の後を追うように亡くなった。数年前から心臓発作に苦しめられていたが、サボテカ人らしい忍耐強さでそれを押し隠してきたのだった。彼が熱望していたベラクルス～メキシコ市間の鉄道はその死後間もなく完成したが、電報網、道路網などのインフラ整備、教育の普及などの夢を叶えることはできず、その後、政権は同じオアハカ出身のメスティソ、ポルフィリオ・ディアスの35年にわたる独裁政治へと移っていく。

(いとう しげこ)



『首都ブラジリアーモデルニズモ都市の誕生』

中岡 義介・川西 尋子 鹿島出版会

2014年6月 311頁 3,800円+税 ISBN 978-4-306-07306-7

1960年4月にブラジルの新首都となったブラジリアは、ブラジル内陸のほぼ中心のセラード地帯に首都を置くという1890年代からの構想が、1956年1月に就任したクビチェック大統領によって実現されたものであった。9月に出た法令で新首都名はブラジリアと定められ、都市構造と主たる要素や道路の配置を含む計画案のコンクールが発表され、26のプランの中からブラジルの建築・都市計画家ルシオ・コスタの提案が採用された。建設地の湖と半島を巧みに取り込んで、政府センター、行政機関、大使館、居住区域等を配し、後世飛行機の形をしていると言われるようになった都市は、首都機能と公園のように生活空間を見事に調和させ、3権機関をはじめとする主要建築のデザインの斬新さ（その多くを建築家オスカー・ニーマイヤーが手がけた）と相まって87年には世界文化遺産に登録されている。

フランスの都市計画・建築家のル・コルビジエが提唱した快適な暮らしを実現するモダニズム都市を、その強い影響を受けたルシオ・コスタが計画したのがブラジリアであるが、決してインターナショナルなモダニズム都市の模倣ではなく、ブラジルという国の首都としてのあるべき姿、ブラジル人のルーツから国民意識を求めて造られ、実現した代表作というべき都市なのである。

本書は、ブラジルの首都の歴史からブラジリアが受け継いだこと、世紀の新首都設計コンクールとルシオ・コスタのプロポーザル、そこへ至るまでのルシオ・コスタのモダニズムからモデルニズモに至る道のり、モデルニズモ都市として誕生したブラジリアのそれぞれの区画や道路配置等の軸、代表的な建築物の設計などの考え方と実情を詳細に解説し、世界遺産指定後のブラジリアの都市としての歴史的現代性の保護にも言及している。多くの計画の構想・プロポーザル審査、建設計画時の設計プラン等の歴史的図版も収録されており、これまでのブラジリア紹介書になかった濃い内容の解説書。

〔桜井 敏浩〕



『越境するペルー人ー外国人労働者、日本で成長した若者、「帰国」した子どもたち』

(宇都宮大学国際学部国際学叢書第5巻) 田巻 松雄、スエヨシ・アナ編 下野新聞社

2015年3月 230頁 2,000円+税 ISBN 978-4-88286-574-2

外国人児童教育問題研究を行ってきた地域社会論研究者と博士課程生に学ぶ日系三世が日本で労働者として働いたペルー人、日本で成長した子弟、帰国した子供、彼らの生活や意識を多面的に明らかにすべく行った調査研究の成果。

第1章では、1990年前後のいわゆる出稼ぎブーム時に来日して以来20年余暮らししてきた労働者8人に、来日の目的、仕事と生活、子供の教育への想いなどを語らせている。第2章では出稼ぎの親に付いて来日した子供たち16人にインタビューし、その成長過程から家族とのつながりの大きなこと、進学と最終学歴への影響要因、将来設計や帰国についてどのように考えているかをみている。第3章は栃木県の外国人児童生徒の25.38%を占めるペルー出身者へのアンケート結果から親の帰国希望と実際、スペイン語教育についての考えを聞き、第4章では来日の経緯と滞在歴、日本語力などから、在住ペルー人の生活と意識を子供の教育、定住志向、国籍により異なる南米出身者の進学率などを集計、分析している。在日ブラジル人についての調査研究事例は多いのに比べ、先行研究の少ないペルー出身者に焦点を当てた地道な聞き取り調査の分析報告書。

〔桜井 敏浩〕